

愛が信じられなくなったら

富島

愛が信じられなくなったら 生きる証しを何に求めるか

1972年4月10日 初版発行

1972年5月1日 第2版発行

著 者 富 島 健 夫

発行者 大 和 岩 雄

発行所 ^{だい お}大 和 書 房

東京都文京区関口1-33

振替東京64227

郵便番号112

電話(203)4511~4

製版・印刷・慶昌堂印刷 製本・東京美術紙工

落丁本、乱丁本はお取替えます <検印略>©1972

0012-000530-4406

大和書房

富島健夫

愛が信じられなくなったら

— 生きる証しを何に求めるか

愛が信じられなくなったら 生きる証しを何に求めるか

1972年4月10日 初版発行

1972年5月1日 第2版発行

著者 富島 健夫

発行者 大和 岩雄

発行所 だいお 大和書房

東京都文京区関口 1-33

振替東京 64227

郵便番号 112

電話 (203) 4511~4

製版・印刷・慶昌堂印刷 製本・東京美術紙工

落丁本、乱丁本はお取替えます <検印略>©1972

0012-000530-4406



第一章／愛のために何を知るべきか

——“ただひとり”からの出発——

だれに“魅力”を感じるか

14

——常識にとらわれない本当の在り方

青春に大切な“心”とは？

22

——美しいことばへの姿勢

愛の“いのち”だけが信じられる

30

——自分のための青春

どんな価値観をもつべきか

37

——“一流”ということを考える

何を求めているか

44

——男の生理と心理について

今、見失われつつある姿勢

—“田舎者”であることの誇りと自信

51

ほんものの友情を育くむために

—人生の孤独の中のふれあい

58

自分のなかの“悪”を見つめよう

—“責任転嫁”という弱者のエゴイズム

65

劣等感^{ひけめ}をどう克服するか

—本来の自分をみつめること

73

“常識”にとらわれすぎないか？

—青春を圧迫する“適齡期”の思想

81

成熟する愛・持続する愛

—“結婚”について考える

89

第二章／愛し得る資格とは

——“その存在^{ひと}”の愛に溺れていいのか——

“愛”を決意させるもの

―何が恋の“きめ手”となるか？

98

ゆれ動く愛

―自己をみつめる眼とは？

110

心をゆたかにするもの

―青春期における異性交際

115

異性へ寄せる微妙な想い

―相手は何に惹きつけられるのか？

120

ありのままの自分を見せる

―“交際”におけるセンスと表現

138

“許す”という女の真理

―“婚前交渉”をどう考えればよいか

142

愛にとって何が大切なのか

―“欲望”だけで性を考える危険

149

早く愛を知ってはなぜいけないのか？

―“常識ある大人”の偏見について

155

第三章／愛が信じられなくなつたら

——歪められない性の認識と行為——

女であることのおののき

160

——はたして“処女”は神聖なのか？

肉体が求めてしまう：

165

——愛のモラルとの葛藤

“愛しているから許す”という心理

170

——妊娠“という事実”に直面したとき

幼ない性の衝動

175

——“早熟”ということ

何を“体験”しようとするのか

180

——若さの焦りと不安

女は何を待っているのか

185

——秘められた快樂への期待

平凡な少女が“小悪魔”に変わるとき

—性へのひけめとその裏側の心理

194

変わってゆく“羞恥”の意識

—明るみに出された“性”

203

“愛し合っているのに…”

—彼女は何を望んでいるのか

208

第四章／＼いのちの真実を求めて

——わが青春を賭け得るもの——

貧しい青春の中の豊かさ

—わが早大時代

214

情熱だけがささえになる

—若き日に賭けるべきもの

223

孤独の中の味わい

—自分流儀の生き方

228

自分と現実との関わり合い

—これだけは知ってもらいたいこと

若者たちの志向するもの

—ナイーブな青春の実験と軌跡

238

232

カバ―写真 白旗史朗
扉イラスト 群 境介

第二章／愛のために何を知るべきか

——「ただひとり」からの出発——



だれに「魅力」を感じるか

——常識にとられない本当の在り方

美しさややさしさと——ある不良少女の横顔

そのころ、ぼくはある不良少女を知った。彼女は美しかった。女らしい香りに包まれていた。そして、ぼくに対してやさしかった。ぼくと彼女は数回話をしただけである。交際というほどのものはなかった。けれども、彼女はぼくのひとつの星であった。

ぼくは彼女に恋してはいなかった。そんな感情は起きなかった。彼女は、ぼくが軽蔑している不良少年たちの多くと、あまりにも深くつきあっていたから。そんな彼女に恋することなど、ぼくの自尊心が許さなかった。おそらくあのころ、彼女はすでに処女ではなかったにちがいない。ぼくはそれを察していた。

それでもなお、ぼくは彼女を好きであった。世間の人たちは、彼女のことを悪しざまに言った。ぼくの友だちも、彼女をのしった。多くのまじめな女学生たちは、彼女をおそれていた。

彼女といっしょに道を歩かなかった。同類と思われてはいけなから。しかし、ぼくは人々のそんな評判など、気にしなかった。ぼくは世間ではない。ぼくは、世間の意見をそのままぼくの意見とするほど、世間に対しての優等生ではなかった。

ぼくはぼく自身のみの気持ちにしたがって、彼女に接した。たしかに、彼女は不良少女であった。しかし彼女は、ぼくに対してけっしてマイナスの存在ではなかった。ぼくは彼女の美しい姿を見るのが好きだった。腰のあたりにまで垂らしている黒髪も、好きだった。彼女と話をするの、愉快であった。

だからぼくは、人々がぼくをどう思おうとも、彼女と道でいっしょになったときは、話をしながら並んで歩いた。世間の目に遠慮して彼女と話をする楽しみを捨てるなど、ぼくの真実に反することであった。

ぼくと彼女は、いっしょに線路を歩いたことがある。夕陽にレールは光り、ぼくたちは足をそろえて枕木を踏んだ。彼女はときどき、コロコロと笑った。肩をぼくの肩にぶっつけてきたりした。ぼくがセキをすると、彼女は心配した。

「ネギを小さくきざんでね、おしょうゆをすこしたらして、熱湯をぶっかけて、ふうふう言いながら呑むの。そのままふとんをかぶって寝て、ね汗をびっしょりかくのよ。ちゃんと着がえを枕もとに用意していてね」

母を失って間もないぼくに、そのようなやさしい注意をあたえてくれる人が、彼女以外にだ